

CONTENTS

- 巻頭言
- 第68回全国学術大会案内
- 全国理事会のお知らせ
- 事務報告
 - 2017-18年度 第3回常任理事会議事録
- 地域部会報告
 - 関西部会研究大会報告
 - 西日本部会研究集会報告

■ 巻頭言

演劇研究と実演の間

森平崇文（神戸学院大学）

日本でも中国でも自己紹介の際に中国の伝統演劇を研究していますと話すと、ではご自身も演じられたりするのですかと質問されたり、それが宴席の場であったりすると何か一節歌って下さいと依頼されたりという経験をずいぶんしてきた。他分野の研究者や世間一般からは、演劇研究というものは自分でも演じたり歌ったりするほど好きな人間がするものと思われているのであろう。私は観る専門でもできません、不調法者で申し訳ありませんと返答した際の相手の軽く驚いた表情を目にすると、やはり観劇だけでなく自分でも何か演じたり歌ったりできた方がいいのではと考えてしまう。しかし多くの舞台に触れ、プロの演劇人の超絶技巧を目の当たりにしてきたからこそ、生半可な気持ちで実演などできるものではない。実際自分の周囲の演劇研究者を見渡しても、自分で演じたり歌ったりされる方はほんの少数で、大多数は観る専門である。

2015年に神戸に移ってから「中国の文化」という科目を担当するようになり、中国演劇の概説をしている。授業内で実際の舞台道具、楽器、衣裳などを紹介したくなり、上海に行くたびに上海京劇院の知人や専門店から少しずつ買って帰るようになった。現在では研究室のかなりのスペースを舞台道具や楽器などが占めている。身の回りに道具があるともっと活用してみたいのが順序というもので、2017年に兵庫県在住の崑曲俳優で研究家の前田尚香先生と面識ができると、前田先生を講師に招いて授業内で崑曲のワークショップを開催した。続いて2018年には神戸市内で「江南春琴行」という中国音楽の教室を運営されている村田順一先生に学内で中国音楽の授業を担当してもらうを通じ、自分で演じ、歌い、演奏する機会に恵まれるようになった。

更に前田先生と村田先生が主催される崑曲公演のメンバーに入れてもらい、2017年から月に一度ほどの練習にも参加している。演目は『牡丹亭・遊園驚夢』、『爛柯山・癡夢』、『雷峰塔・水門』の3齣で、

主役は前田先生に三野雄一郎さんという、中国留学時代に北京の「北方崑曲劇院」所属のプロの俳優に師事した2人が務められ、端役として神戸学院大学の学生5人を含む未経験者が出演する。楽隊は村田先生の生徒や関西在住の中国民族音楽の同仁が中心で、私も中鑼と小鑼の担当で末席を汚している。演者も楽隊も日本人で構成され、しかも3齣上演という公演は大変珍しい。公演は2018年10月と11月の2回で、今はその準備で大わらわである。

崑曲公演に参加するメンバーは一部を除いて、大多数が会社員、医師、主婦、学生など中国演劇の専門家ではない。しかし中国音楽や演劇に対し真摯に取り組むメンバーとの交流は、仕事としてではなく趣味として中国文化に触れる楽しさを実感できるよい機会となっている。

■第68回全国学術大会のご案内

会員各位

2018年の日本現代中国学会全国学術大会は、10月20日(土)、21日(日)の両日、早稲田大戸山キャンパスにおいて開催することになりました。

今年の全国大会の共通論題のテーマは「新世紀中国研究の挑戦——明治維新150年、改革開放40年」です。

記

日時：2018年10月20日(土)12時より受付開始、21日9時より受付開始

場所：早稲田大学戸山キャンパス

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

キャンパス・マップ(大会プログラム添付の地図をご覧ください。下記URLでもご覧いただけます。)

交通アクセス <https://www.waseda.jp/flas/cms/access/>

①徒歩の場合 JR 高田馬場駅より徒歩約20分。

②地下鉄利用の場合 地下鉄東西線早稲田駅下車、徒歩数分。

③学バス利用の場合 JR 高田馬場駅前より「学02 系統早大正門行き」馬場下町下車(乗車約10分)、徒歩数分。

参加費：1000円(設備費・資料代等)

懇親会費：20日総会終了後にキャンパス付近の染谷記念国際会館で懇親会を開催します。奮ってご参加ください。参加費は一般会員5000円、学生4000円です。(添付のマップをご参照ください。)

★参加申し込みはウェブからの登録になりました。必要事項をご記入の上、10月1日(月)までにご登録ください(入力の詳細は事務局から連絡があります。)

★参加費、懇親会費、学会年会費は同封の振込用紙に必要事項をご記入の上、10月1日(月)までにお振り込みください。

★21日は日曜日のためキャンパス内の食堂は閉店しています(近くにレストラン・コンビニがあります)。

早稲田大学大会実行委員会 千野拓政(代表)、斎藤泰治

お問い合わせ先

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学学術院 千野拓政研究室気付

E-mail : [waseda.gendai\[at\]gmail.com](mailto:waseda.gendai[at]gmail.com)

■全国理事会のお知らせ

下記の要領で全国理事会を開催いたします。理事の方はご参集ください。

日時：2018年10月20日（土） 10:30-12:00

場所：早稲田大学戸山キャンパス 33号館16階第10会議室

■事務報告

□2017-18年度 第4回常任理事会議事録

日時：2018年7月28日（土） 14:00-17:00

場所：早稲田大学 戸山キャンパス 39号館4階第4会議室

交通アクセス：<https://www.waseda.jp/top/access/toyama-campus>

出席：田中仁理事長、趙宏偉副理事長、巖善平事務局長、辻美代会計担当理事、中村元哉関東部会代表、北川秀樹関西部会代表、砂山幸雄東海部会代表、瀬戸宏規約・財務健全化委員、千野拓政開催校代表（2018年）

欠席：松岡純子西日本部会代表、宇野木洋編集委員長、日野みどり広報委員長、川島真規約・財務健全化委員、三好章開催校代表（2017年）

【報告事項】

1.会務報告

巖事務局長より会員動向および新入会員について報告があった。個人会員は前年同期比で8名減ったが、主として退会者の増加によるものであった。詳細は下記の通り。

1) 会員動向

会員数 2018年06月30日現在

会員種別	年度初	入会	再入会 復会	退会	6月30日
個人会員	697	19	0	10	706
団体会員	5				5
合計登録者数	702	19	0	10	711

2) 新入会員（17名）

第3回常任理事会（2月22日）以降、各部会理事会で承認された新入会員は16名。詳細は下記の通りである。関東/9名：楊駿驍、段書暁、LIU QIAN、張宇博、萩原隆太、徐懿、孫嘉睿、彭高明、高橋知子。関西/4名：謝川子、楊鵬超、黃麗敏、尹冠球。西日本/1名：周小稚。東海/3名：山下大喜、藤川美代子、曾根英秋。

2.会計報告

辻会計担当理事より会費納入状況、郵便振替出入金、および会計出入金について報告があった。会費未納なしの割合が前年同期比で7ポイント低かったほか、財政状況は全体として正常である。詳細は下表の通り。

会費納入状況 2018年06月30日現在

	未納なし	未納1年	未納2年	未納3年	未納4年	合計
個人	421	168	66	34	17	706
団体	4	1				5
合計	425	169	66	34	17	711
累計	425	594	660	694	711	711
累計比率	60.5%	84.6%	94.0%	98.9%	101%	
住所不明		3	5	7	9	24

3.編集委員会報告

宇野木編集委員長による書面報告は下記の通りである。

1) 『現代中国』第92号の刊行に向けた到達点

○92号の進捗状況

7月上旬、主要な原稿（特集関係・投稿論文・書評など）は全て入稿。学会事務局（編集支援）がゲラを作成し初校のやり取りを実施し始めている。

○掲載予定内容

【特集】ロシア革命百年と中国（2017年全国学術大会共通論題）：論文＝3本（1本辞退／但し、3本中1本は「要旨」のみ）、討論＝2本

【小特集】香港返還20周年：論文＝1本（著者5名による共著論文）

【論文】：3本（専任職2名／院生1名）

【研究ノート】：3本（専任職1名／院生・PD2名）

【書評】：歴史分野2本、文学・思想分野1本、経済分野＝1本、社会・民族分野＝2本

【その他】：SUMMARY／2017年度会務報告／『現代中国』投稿規定・原稿執筆要領／編集後記

2) 以上の到達点を踏まえた上での報告事項ないしコメントなど

○投稿論文の状況

・投稿論文数＝17本（91号＝9本）：文学関係9本／歴史関係4本／政治関係3本／経済関係1本／社会関係＝0本。91号と比べれば、量的にはほぼ倍増したが、要因は不明（編集委員会で意識的な声かけは確認し合ったとはいえ）／ただし、分野の偏りも見られる。

・いわゆる専任職・日本語母語話者の増加：「専任職（任期制含む）」10本（前年1本）／「院生・OD・PD」6本（7本）／「非常勤講師その他」1本（1本）。

・日本語母語話者11名（前年5名）／中国語（系）母語話者6名（4名）。

・「学際的」ないし従来の「研究分野」からはみ出る投稿論文の増加傾向：学際的学会であるが故に、ディシプリンが比較的鮮明な研究分野の論文は、ディシプリンがより限定的な他学会誌に投稿している可能性

編集委員会としては、最終的に、論文3本／研究ノート3本の計6本の掲載を決定した。

・今号においては、査読結果を踏まえた編集委員会評価がD評価（修正原稿の再査読の結果によって研究ノートとして掲載可）となった投稿論文の内、4本が「辞退」を申し出てきた点に留意（投稿者が専任職の場合が多い）。

○編集作業に関わって——特に負担の公平性の問題

・負担の公平性を考えて、本来「文学・思想分野」が担当すべき9本の内2本を、分野が比較的・相対的に近く分野別割り振りのなかった分野に割り当てるといふ、従来あまりなかった試み（ただし、「文学・思想分野」は随時相談に応じるといふ確認）。→編集委員会で了承・決定・ただし、種々の背景・理由はあったものの、新たに割り振った分野は、ほぼ動ききれず、編集作業の後半段階に到った際には、「文学・思想分野」が引き取るしかない状況が出現した。

→9本の担当とは...＝査読者を18人依頼する／査読結果を踏まえて9本の論文の評価を下す／掲載可能性があると思われた4本の論文に対して、査読結果を踏まえた修正を依頼する／再査読者を4人確定して、修正稿の再査読を依頼する／再査読結果を踏まえて、論文としての掲載か研究ノートとしての掲載か、または、どうしても掲載不可かといふ評価を下す／以上の最終結果を整理して編集委員会（メール会議）に提案する...といふ作業を担うことを意味する。

→「文学・思想分野」の3人の編集委員は、ほぼ2ヶ月間、フル回転で編集作業に従事

・上記の作業をやり抜いてくれた「文学・思想分野」の編集委員には感謝するよりないのだが、当然ながら、「文学・思想分野」の編集委員からは、負担の公平性に関わって、かなりシビアな「意見」も提出されている点は、確認しておきたい。

○内容充実に向けて――編集企画その他

91号（前号）は投稿論文数が9本と少なく、かつ一定の水準が期待できる専任職の投稿も極めて少なかった（1本のみ）こともあり、「特集」（共通論題）に対する評価は依然として高いものの、学会誌としての期待に応じていく水準（量と質）を、全体として如何に維持・発展させていくかが、改めて問われている側面も存在する。

・上記の課題に向けては、全国大会の企画分科会、地方部会大会シンポジウムなどとの連携を強めていく方向が重要であることが、この間の編集委員会で意見交換されつつある。

・今号においては、そうした試みの具体化として、また本学会らしい時宜に適した企画として、昨年6月に開催された関西部会大会における共通論題シンポジウム「香港主権返還後の20年――独自性のゆくえ」の内容を、「小特集」として掲載することを決定した。

→ただし、4人の報告者が報告内容をそれぞれ論文化した際にはかなりの分量になるので、コーディネータを中心に1本の報告論文（50枚程度）にまとめてもらう形式とする。

→「特集」（全国大会共通論題報告の論文化）は査読不要（依頼原稿）としているが、今回の「小特集」は初めての試みでもあるので、専門家1名による査読を実施することとした→報告論文の評価（「小特集」の意義も含む）と同時に貴重なアドバイスも提出され、内容の豊富化に役立った点を付記しておく。

今後とも、全国大会企画分科会、地方部会大会シンポジウムなどとの連携の強化は重要であり、編集委員会としてその企画内容にコミットしていく際などには、掲載における査読の必要性の問題なども検討していく必要があるだろう。

3) 新たな学会事務局との連携その他について

○編集支援体制

今号より、編集支援体制は、全面的に学会事務局（中国研究所）が担うこととなった

・担当者が中国関係学術雑誌の編集業務経験が極めて豊富なこともあって、編集作業は順調に進んでいると言えよう

→昨年末に編集委員長が中国研究所を訪問し、「編集マニュアル」などをめぐって丁寧な懇談を行なったことが、意思疎通の順調さにつながったと考える。

○増頁に関わる問題

今号は、投稿論文が多かったこともあり、掲載した論文・研究ノート各3本（前号は論文3本のみ）、それに「小特集」論文1本が加わったこともあり、総頁数が220頁程度になる可能性がある。

・学会事務局委託契約内容は一括請負制（編集支援業務に関しては前号並の分量の学会誌製作業務・経費）であるため、予定経費を超える可能性がある旨の申し出がなされている。

→確かに、前号は145頁（広告などを除く）とページ数が比較的少ない傾向にあったので、常識を超える経費増が生じたとすれば、一定の補填の検討が必要かもしれない。

→その一方で、この10年程度を振り返ってみた場合、81・2～84号（2007・8～10年）頃までは、240～250頁前後が一般的だった点には留意（86号＝2012年は学会創設60周年のシンポジウム・資料掲載ということもあるが、266頁となっている←これが近十年程度における最多頁数）。

・いずれにせよ、学会誌の頁数は、投稿論文数や掲載可論文数の多寡によって変化する可能性が大きい（学会誌として学術的に意義ある論文を多く掲載することは期待に応えることであり責務でもある／もちろん、財政的視点は重要であり、限界は踏まえつつも）。

→委託契約の中身を、もう少し精緻化していく必要性

今号に関しては、学会誌刊行後、明細を踏まえて中国研究所と協議する必要がある。

・なお、事務局から、財政上の観点も含めて、学会誌の判型をA4サイズにする提案もなされているが、編集委員会としては、「参考意見としては承るし、必要であれば作成されたサンプルを踏まえて検討も進めるが、編集委員会としてはまだ決定はしていないし、そもそも編集委員会で決定できる性質の問題でもない」と回答している点は、改めて確認しておきたい。

4.広報委員会報告

日野広報委員長より書面による活動報告があった。前回の第3回常任理事会（2月22日）で報告を行って以降、広報業務は順調に進展している。学会ニューズレター54号を編集し、5月30日に配信した。また、2月16日から7月25日までに、18件の情報更新を実施した。掲載ページ内訳は、「学会規約」1件、「全国学術大会」2件、「地域部会研究会」9件、「学会ニューズレター」1件、「学会掲示板」5件である。

5.地域部会報告

1) 関東部会

中村関東部会代表より、2018年度春季修士論文報告会について報告があった。5月12日の午後、東京大学駒場キャンパスで行われた報告会では、2つの会場で計9本の研究発表があった。分科会の形式が採られたこともあり、多くの参加者が得られた。今後、定例研究会も計画している。

2) 関西部会

北川関西部会代表より、関西部会第2回事務局会議（3月14日、関西大学梅田キャンパス）、第2回理事会（6月2日、関西大学100周年記念館）、および2018年度関西部会大会（同）がそれぞれ開かれたとの報告があった。部会大会では、4分科会で計13本の研究発表があり、共通論題のシンポジウム（改

革開放 40 年と上海) では、企業経営者や中国からの学者による講演もあった。

3) 西日本部会

西日本部会松岡代表より、理事会 5 回、講演会 2 回、特別講演 1 回が催され、2018 年度研究集会（政治、社会、言語・文学分野で 4 本の研究発表）が 6 月 9 日に西南学院大学西南コミュニティーセンターで行われたとの書面報告があった。

4) 東海部会

関東部会砂山代表より、第 11 回研究集会が 7 月 7 日に愛知大学名古屋校舎で開催され、5 本の研究発表があったとの報告があった。新規入会者 3 名、次期推薦理事 2 名に関する報告もあった。

6.新理事会選挙

田中理事長より 2019-20 年度理事選挙の結果について報告があった。「理事選挙規定（試行）案」に則り理事選挙が行われ、開票結果に基づいた被選出理事 25 名、および各部会からの被推薦理事 25 名、計 50 名の新理事が下記の通り決定した。

関東部会（25 名）：青山瑠妙、阿古智子、飯塚容、家永真幸、石井知章、石塚迅、伊藤徳也、王雪萍、大西広、加茂具樹、川島真、倉田徹、小嶋華津子、鈴木賢、孫安石、高原明生、高見澤磨、趙宏偉、中村みどり、中村元哉、深町英夫、福田円、松本ますみ、丸川知雄、山本真

関西部会（15 名）：石川禎浩、宇野木洋、小都晶子、何彦旻、梶谷懐、北川秀樹、巖善平、菅原慶乃、滝田豪、田中仁、辻美代、中川涼司、西村正男、日野みどり、水羽信男

西日本部会（5 名）：間ふさ子、大澤武司、小笠原淳、下野寿子、新谷秀明

東海部会（5 名）：加治宏基、菊池一隆、工藤貴正、黄英哲、砂山幸雄

7.幹事職について

田中理事長より次期全国理事会幹事について説明があった。学会規約第 10 条（5）にある幹事と、常任理事会の各部会の下に設ける幹事の選出方法について確認した。つまり、全国幹事は理事長が委嘱し、部会の活動を遂行する上で必要に応じて設ける幹事は部会長が嘱託する。

8.その他

巖事務局より「会員名簿発行について」の第 3 回常任理事会議事録の改正について報告があった。この間、学会事務局との調整を行い、会員名簿発行について、下記の 2 点が承認された。① 2018 年会員名簿を発行する。名簿は、会員名簿 2013 年版と同じような冊子で発行する。② 掲載する会員情報は、氏名、所属機関、e メールアドレス、専門分野、の 4 項目とする。ただし、会員が掲載を否とした項目は掲載しない。

【審議事項】

1.新入会の承認

8 名の新入会が承認された。詳細は下記の通り。関東部会 7 名：李珏、岩本広志、Wong Pui Yu Jolie、陳雪、李晨、屈博煒、小門弘幸。関西 1 名：袁也。

2.2018 年全国学術大会について

1) 大会プログラム・会場

全国学術大会の準備状況について開催校代表の千野会員から資料に基づいた説明があった。それを基に大会プログラムが審議、了承され、今大会では報告要旨集を作成しないことも了解された。

理事会、共通論題、分科会等の会場について現場を案内してもらい、問題がないことが確認した。

2) 学会事務局の支援体制

学会事務局が大学生協から中国研究所に移転されたのに伴い、全国学術大会へのサポート体制について協議を行った。従来の業務内容を点検しつつ、実情に合わせて以下の3点を中国研究所側に対応してもらうこととした。

第1に、大学生協の時と同じく、大会の参加費、懇親会費を会費と共に請求する。つまり、従来どおり、請求書、振込用紙を大会プログラムと同封して発送する。

第2に、大会・理事会の出欠確認について、去年はハガキと Web の両方で行ったが、今後は Web だけで行うことにする。例えば、会員一斉メールで大会プログラムを送信し、出欠確認について Google form を使って回答してもらう。予め設定した回答事項を Google form で記入し送信してもらったら、フォーム送信後の控えメールが自動送信され、全体のデータも後にエクセルデータとしてダウンロードできる。

第3に、大学生協時代に使われた、大会開催時の事務用品（名札ケース、セロハンテープ、マジックペン、など）は一つのダンボールに入っており、いま、中研に保管されているはず。所在をご確認の上、大会開催の1週間前に開催校（早稲田大学）に送付する。

3) 報告原稿等のホームページ掲載

報告者の提出した報告原稿またはレジュの学会ホームページ掲載について、昨年大会と同じ処方に対応することが了承された。つまり、①報告者にフルペーパーまたは報告レジュメ（以下、資料）の任意提出を求める、②提出された資料をパスワード付き PDF で学会ホームページに期間限定の掲載を行う、③広報委員会が開催校と連携して関連作業を担う。

強い台風第12号が関東に接近する中、第4回理事会は予定通り終了した。

■地域部会報告

□関西部会研究大会報告

6月2日（土）、関西大学100周年記念会館にて2018年度の関西部会大会が開催された。詳細は以下の通りである。

・歴史分科会（参加者：約10名）

本分科会では3本の報告があった。第一報告の左春梅会員（関西大学法学研究科・院生）「華北問題における黄郛の位置づけ」は、1933～34年に行政院駐北平政務整理委員会委員長として黄郛が関東軍との間で行った戦区善後交渉について、日中の基礎史料をふまえて考察する。コメンテーター・安井三吉

会員（神戸大学名誉教授）は、この研究課題は十五年戦争研究との関連から日本・中国・台湾で異なった位置づけのもとでの蓄積が存在することから、報告者がどのような立ち位置から論究しようとするのかを明示する必要があるとした。第二報告の松本理可子会員（早稲田大学アジア太平洋研究科・院生）「清朝後期の同仁堂にみる企業フィランソロピー」は、清朝期の同仁堂が皇室御用達としての「絶対的地位」に甘んじることなくフィランソロピー（民間による社会貢献活動）に突き動かしたものは何かと問い、(1) 中国独自の事業、(2) キリスト教の影響、(3) 儒教の影響という仮説を吟味・検討した。コメンテーター・上田貴子会員（近畿大学）は、経済社会学の報告を歴史学の立場から照射して一次史料に当たることの重要性を強調し、かつ官紳・紳商の事例や北京の実態などに言及した。第三報告の横山政子会員（志學館大学）「大躍進期の農村人民公社における豚・鶏・兎の「飼育員」：黒竜江省を事例に」は、総動員体制としての大躍進運動が農民の生活をどのように組みこみ、また農民はどのように対応したのかについて、インタビュー・新聞記事と档案資料によって復元する。歴史学（社会史・生活史）にもとづく報告に対して、コメンテーター・谷川真一氏（神戸大学）は社会学での大躍進期中国政治の含意を概括するとともに、報告で紹介された生き生きとした興味深い事例を一般化することによって既存の大躍進研究のなかに位置づける必要があると述べた。（記：田中仁会員）

・経済分科会（参加者：約 20 名）

本分科会では、三本の報告が行われた。概要は以下の通りである。

第一報告の陳艶（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科・院生）・厳善平（同志社大学）「中国農村における「精準扶貧」政策——安徽省含山県の事例分析を手掛かりに」は、貧困削減政策およびその実績を考察した上、習近平政権が推し進める「精準扶貧」政策にフォーカスし、安徽省含山県での事例研究を通じて、その具体的な実施体制や効果、問題点を分析した。コメンテーターからは、本研究の学術的な意義として、安徽省の農村部にある貧困県、という代表性の高い地域における政策の実施状況を分析対象に選ぶことで、今後の中国の貧困対策全般に対する適切なインプリケーションを提供していることが挙げられ、「精準扶貧」政策のターゲティングの精度、補助金制度の在り方、人的資本の形成、政策のフィードバック等に関するコメントがあった。

第二報告の尹冠球（京都大学）「農家の合作社の販売事業への参入意向の規定要因」は、中国における農民專業合作社の発展状況及び課題に関する考察を踏まえながら、なぜ合作社を中心とする組織流通が予想通り進展できなかったについて、中国の遼寧省・大連市内の野菜生産農家 100 戸（調査対象地域の野菜生産農家の約 20%を占める）を対象に、対面聞き取り調査の結果に基づいて分析した。コメンテーターから、調査農家の特性や地域の特性などについての質問があった。また、地域的な特性や高齢化に伴って仲買商人の取引についての評価、改善について、もう少し議論が必要だといったコメントがあった。

第三報告の黄声遠（立命館大学）「中国の社会保障の特徴と今後の動向について」は、社会保障の規範理論を踏まえ、中国の社会保障制度の発展と特徴について考察した。コメンテーターは、中国社会の変貌とともに広がる地域間格差、部門間格差と世代間格差に対応できるような社会保障制度が必要であると指摘したうえ、現在中国の社会保障制度は伝統的な家族内の自助努力を中心とするシステムから村民同士・隣人同士の互助努力、さらに今後の公助へと移行しつつあるという特徴があるというコメントがあった。（記：何彦旻会員）

・文学分科会（参加者：約 15 名）

第一報告は、菅原慶乃（関西大学）「映画パンフレット・説明書から構想する観客史の可能性について—KU-ORCAS の劇場資料アーカイブズとデジタル人文学」である。菅原氏は、映画説明書などエフェメラ（保存を前提としない一時的な印刷物など）資料のアーカイブ化が進み、作品と観客との相互参照関係を軸とした新たな視点を持つことが可能になり、映画史を再編成し観客史を構築する道が可能になる、と提起した。失われたフィルムや過去の舞台表現を文芸史研究が記述する可能性が開けうることも指摘した。

第二報告は、謝川子（大阪市大院生）「崔子恩のクィア映画における宗教観」である。謝氏は、中国のクィア映画監督崔子恩の人生を概観した後、これまで崔子恩に対する深い研究はほとんど無く、崔子恩のクィア映画について宗教的方面からその現実意義を探求する研究はほとんど無かったことを指摘した。謝氏は崔子恩の作品を具体的に分析することで、崔子恩はクィア映画を通してカトリック宗教観を活用し、ポストモダン映画表現で中国異性愛中心主義現実社会を非難し、映画の反体制という性格を強調していることを明らかにした。

第三報告は、楊靈琳（関西学院大学）「劉慈欣の「地火」について」である。楊氏は、中国の代表的な SF 作家劉慈欣（1968-）の短篇小説「地火」（2000）の分析を通して、1980 年代後半から出されていた中国の特徴あふれる SF 小説とは、という問いに対して、劉慈欣が、自分が熟知する科学技術を描くこと、現代中国に存在する社会問題を描くことだ、彼なりの回答をしたことを指摘した。SF 小説を借りて現代中国の下層の人々の社会的地位を改善させる劉慈欣の創作目的も明らかにした。

今回の 3 報告はいずれも意欲的な聞き応えのあるものだったが、午前中という時間のためか、参加者がやや少なかったのが残念であった。（記：瀬戸宏会員）

・企画分科会：共通論題「改革開放 40 年と上海」（産業・経済分野）のプレ報告（参加者：約 20 名）

第一報告・辻美代（流通科学大学）「中国ファッション産業発展に関する試論」は中国のアパレル産業の発展を概観したものである。大量生産の香港型と高品質の日本型の二つの委託加工生産から始まった中国のアパレル産業は、その後生産だけから原材料調達、デザイン・企画、販売、ブランドと順々に領域を拡大して、自社ブランドによる OBM として発展すると共に、関連産業もすべてそろえたフルセット型産業構造となっている。

第二報告・李敏（東華大学）「改革開放の背景にある服飾教育と人材育成」は改革開放後に大学にファッション・デザインの専門課程が設置され、発展を遂げた過程を、東華大学を中心に紹介したものである。1984 年に華東紡織学院（現東華大学）にアパレルに関する専門課程が置かれたが技術的な課程が中心であった。1993 年に中国紡織大学（現東華大学）にファッション・デザインを行う服装学院が設置され、その後大きく発展した。

第三報告・朱奕（東華大学）「上海ファッション産業についての事例分析」は上海アパレル企業の伝統的な経営モードである自営、フランチャイジー、取次販売・代理からの経営革新を明らかにしたものである。COCO DEAL は直販と委託の両立、リアル店舗に新品をネットに持越商品を置く補完関係、予測値に基づく生産をフィードバック情報で調整する仕組みなどを構築している。DFO はデザイナー・ブランドに対して、オフラインとオンラインの両方でプラットフォームを提供している。

第四報告・邵丹（東華大学）「上海ファッション産業経営環境の現状と発展」は、上海のファッション産業および「海派」の発展要因を明らかにしたものである。上海は地理的位置、政策支援、文化・消

費習慣、ビジネス環境の発展、人材の面でファッション産業発展の基盤があり、また、かつての紡織工場などがファッション拠点に転換される中で、ICICLE といった「海派」のニューブランドが発展している。(記：中川涼司会員)

・共通論題・シンポジウム (参加者：約 60 名)

今年度の関西部会大会共通論題は、中国の改革開放 40 周年を記念し、大阪の姉妹都市であるビジネス都市・上海の改革開放 40 年に焦点を当て、中国最大の経済都市「上海」の急激な変化を振り返り、今後の中国を展望しようとするものであった。

基調講演を古林恒雄・上海華鍾投資コンサルtantとグループ董事長・総経理にお願いした。続いて、産業・経済分野から楊以雄・東華大学(元中国紡織大学)服装学院教授が「上海繊維産業の変遷(1978-2018)」と題する報告を行い、文学分野からは松村志乃・神戸市外国語大学客員研究員が「上海と『人民文学』—王安憶と茹志鵬を中心に」と題する報告を行った。

古林恒雄氏は、鐘紡(株)入社後、改革開放が始まった 1978 年から上海石化向け PET プラント輸出に係り、以後、中国事業開発に従事し、20 数社の合弁会社を設立運営し、現在、華鍾コンサルtantグループの董事長・総経理を務める。まさに改革開放の生き証人である(山田清機著『中国ビジネスは俺にまかせろ』朝日新聞出版、2011 年に詳しく紹介されている)。古林講演(「改革・開放」40 周年と上海)では、40 年にわたる改革開放の成果を、国際比較を交えながら様々な角度から GDP を用いて説明された。また、習近平体制の現状が報告され、現地で中国ビジネスに携わる古林氏から、日本の否定的な中国報道について苦言が呈された。

続く楊報告では、改革開放 40 年にわたる上海繊維産業の変化を、改革開放前 30 年(中華人民共和国設立)と合わせて詳細な報告が行われた。また、改革開放の現状として、上海で活躍が顕著な三つの企業(ICICLE、DFO Showroom そして三槍)が紹介された。さらに松村報告では、茹志鵬、王嘯平夫婦と娘王安憶の確執を描きながら上海人民文学界における改革開放 40 年が報告された。とりわけ老革命家であり共産主義者である人民文学作家の母茹志鵬と「六四」を機に人民文学から距離を取り「小説家」へと変わっていく王安憶の対比は中国社会の変化を描き出すものであった。

古林基調講演に対し、日本人の偏った中国認識について、また、日本企業の中国投資の変化についてなどの質問が寄せられた。質問に対し、我々中国を知っている者が中国の本当の姿を伝えてほしい、中国を知らないことは日本にとって良くないことである。中国に安い労務費を求める時代は終わった。中国で如何利益を上げるか、中国の要求と合致すれば利益を上げることができる、など回答があった。

楊報告に対しては、繊維産業の発展区分には、生産面、技術面、外資の役割、上海の位置づけなどの要因が必要ではないか、また、上海でうまくいっている企業として挙げた ICICLE とワールドの関係や三槍のガバナンスについてなどの質問が寄せられた。質問に対し、ユニクロの成功は柳井氏の大胆な店舗投資にあり、製品は日本より 2 割割高だが、売れ行きは良い。また、ICICLE はシンプルな天然素材を用い、着心地や環境をコンセプトにしており、1 着 10 万円から 20 万円するが、売れ行きは上昇を続けている。古林氏からも、これからの上海では繊維産業の発展は望めず、ファッションセンターとしてリードして行くであろう、とのコメントがあった。

松村報告に対しては、王安憶に文革を描いた作品はないのか、改革開放は研究対象になるのか、王安憶は何に対して、如何戦ったのか、また、中国人作家の国際的評価はどうか、などの質問が寄せられた。回答としては、王安憶は小卒で文革を迎え、文革から離れられず、文革中のことは描いている。

また、王安憶は文壇のアイドルであり、要職に就くのは当然であったが、共産党員ではなく、体制内に取り込まれないよう距離を置いていた。また、王安憶の作品は日本語翻訳は少ないが、米仏では多く翻訳されている。中国のSF小説は評価が高い、などであった。(記：辻美代会員)

□西日本部会研究集会報告

○プログラム

日時：2018年6月9日(土) 13:30~17:30

場所：西南学院大学 西南コミュニティーセンター2階会議室

- 第1報告 【政治】 司会：大澤武司(熊本学園大学)
13:30~14:10 「閩台関係の制度化に関する一考察」 下野寿子(北九州市立大学)
- 第2報告 【政治】 司会：大澤武司(熊本学園大学)
14:10~14:50 「趙紫陽の遺言~中国の民主化へ向けて~」
横澤泰夫(元 熊本学園大学教授)
- 第3報告 【社会】 司会：新谷秀明(西南学院大学)
15:00~15:40 『『優秀』というレッテルとその資源化』
太田千波留(熊本学園大学非常勤講師)
- 第4報告 【言語・文学】 司会：甲斐勝二(福岡大学)
15:40~16:20 「歌謡からみる馬幫文化」 金縄初美(西南学院大学)
- 【特別講演】
16:30~17:30 「郭沫若と福岡」(郭沫若逝去40周年・九州大学留学100周年)
岩佐昌暉(九州大学名誉教授)
- 17:30~17:45 西日本部会総会
18:00~19:30 懇親会(西南学院大学 西南クロスプラザ2階)

○報告概要

1.下野寿子会員(北九州市立大学)による第1報告「閩台関係の制度化に関する一考察」は、福建省の対台湾政策の一環として推進されてきた「台商誘致・两岸経済協力」に関するこれまでの研究・考察の蓄積を踏まえつつ、政治的・経済的な視角からのみでは考察することが難しい「閩台関係」の「紐帯」の内実を理解するため、新たな考察対象として、两岸の「基層社会の交流」ともいえるや媽祖信仰や祖廟再建・維持をめぐる協力などの事例を紹介した。これにより中央(北京)の「中台統一」の論理とはまた異なる文脈からの、より「現場」に即した「閩台関係」の考察が必要だと訴えた。参加者からは、媽祖信仰に関する福建・台湾の文化的・宗教的類似性について指摘があり、くわえて、第2期習近平政権発足後に中国政府が推進する「恵台31条」をはじめとする「两岸融合発展理論」に基づく対台湾優遇政策が今後の「閩台関係」に与える影響などについても質問がなされた。

2.横澤泰夫会員(元・熊本学園大学)による第2報告「趙紫陽の遺言—中国の民主化に向けて」は、天安門事件後、2005年に逝去するまで軟禁状態に置かれていた趙紫陽元総書記が残した言説(回想録・インタビュー・伝記などに収録)を分析し、趙紫陽の政治改革思想について、民主運動家・劉曉波の政

治改革思想と比較しつつ、その要点を紹介すると同時に、その思想の持つ可能性と限界について論じた。参加者からは、趙紫陽関連の書籍が香港で2004年から2010年までの胡錦濤政権下に集中して出版されていることの意味や習近平現政権下における言論統制や出版規制の現状などについて質問がなされた。

3.大田千波留会員による発表「『優秀』というレッテルとその資源化——中国広東省広州市と浙江省寧波市における入党実践の事例から——」は、広州市と寧波市にある大学で独自の聞き取り調査を行った結果をもとに、共産党に入党するという政治的行為において「優秀」というラベルが社会的資源（人間がその活動や関心に対して様々に働きかけることで「何かになる」という状態を創り出すもの）とされている様相について考察した。大田氏は、「優秀」の内実よりも「優秀」という言葉自体が「実質的に有意味な」ものであるとし、大学組織が必要とする「優秀」な人材と学生の生活世界での「優秀」の意味は相互に関係性を保ちつつ、互いに異なった理解をされていると結論づける。質疑応答では、実際に中国の大学党組織の事情に詳しい会員からの具体的な指摘があった。

4.金縄初美会員の「歌謡からみる馬幫文化」については、馬幫とは、主に騾馬からなる輸送隊、キャラバンのことである。雲南ではこの馬幫が山間部の村々を結ぶものとしてかつては経済生活に不可欠なものとなっていた。そこには分業体系や家族婚姻形式、宗教など、社会生活全般にわたって馬幫の影響がみられる。今回の発表は、その影響を馬幫を唱う歌謡から考えようというものである。

馬幫自体の研究は既に幾種かできているが、これを今に残る歌謡から民情を通して見ようとするものは珍しいのではないか。このような歌謡研究は馬幫の理解に肉付きを与えるものとして有効であろう。近年輸送手段の変化によりその活動は急速に縮小し、所謂茶葉古道を使った長距離輸送の経験者も高齢化が進む。各種記録の収集と保存を期待する。

=====

日本現代中国学会事務局

〒112-0012 東京都文京区大塚 6-22-18

一般社団法人 中国研究所内 日本現代中国学会事務局

TEL 03-3947-8029

FAX 03-3947-8039

EMAIL c-genchu[アットマーク]tcn-catv.ne.jp

郵便振替：東京00190-6-155984

広報委員長：日野みどり（愛知大学）

ニューズレター編集：渡辺直土（熊本大学）

日本現代中国学会HP：<http://www.genchugakkai.com>

=====